

Taiwan as a Polunesian cultural homeland

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17019

ポリネシア文化起源地としての台湾

Taiwan as a Polynesian cultural homeland

酒井 中 (金沢大学)

Sakai Ataru (the University of Kanazawa)

はじめに

モンゴロイドの分布域は、アジアから太平洋を越え新大陸にまでおよぶ。とりわけオーストロネシア語族と呼ばれる言語集団はその分布域の大部分に展開する。その分布域は、東アジアから太平洋に、西はマダガスカル島、東はハワイやイースター島にまで分布している。この広大な地域の中で、人類がいつ、いかにして居住域を拡げていったのかという問題には数多くの研究者が関心を寄せている。

本稿では、オセアニア考古学における「集団間の交流」を論じる準備作業として、オーストロネシア語諸民族の移動および文化起源論に関する研究状況を整理・考察する。

ポリネシア人の起源に関する研究

民族学者の岡正雄や考古学者の江上波夫は、揚子江流域に勢力を持っていた越や呉の言語がオーストロネシア語であったと推測している (岡 1979 ; 石田ほか

1992)。大林太良は、『魏志』倭人伝に記される倭人の風習が著しくオーストロネシア語文化的であると指摘している (大林 1977)。いずれも東アジア史の先史時代集団の中に、オーストロネシア語族の物質文化や習俗との共通要素を見出しているの発言である。

また言語学者の土田滋は、オーストロネシア語の成立過程を次のように説明する。

オーストロネシア語は東南アジアで成立し、その一部がオセアニアで先住者と交易を始め、ピジン言語が発達する。こうして東南アジアからの新しい文化の波の影響を受けた人々が、さらに西の南太平洋の島々へ移動を開始した (土田 1989)。

言語学者のブラストや先史学者であるベルウッドは、「台湾あたりにオーストロネシア語族の最も古い祖語があり、それが南方に広がってフィリピンあたりでオセアニア系とインドネシア系に二分された (ブラ

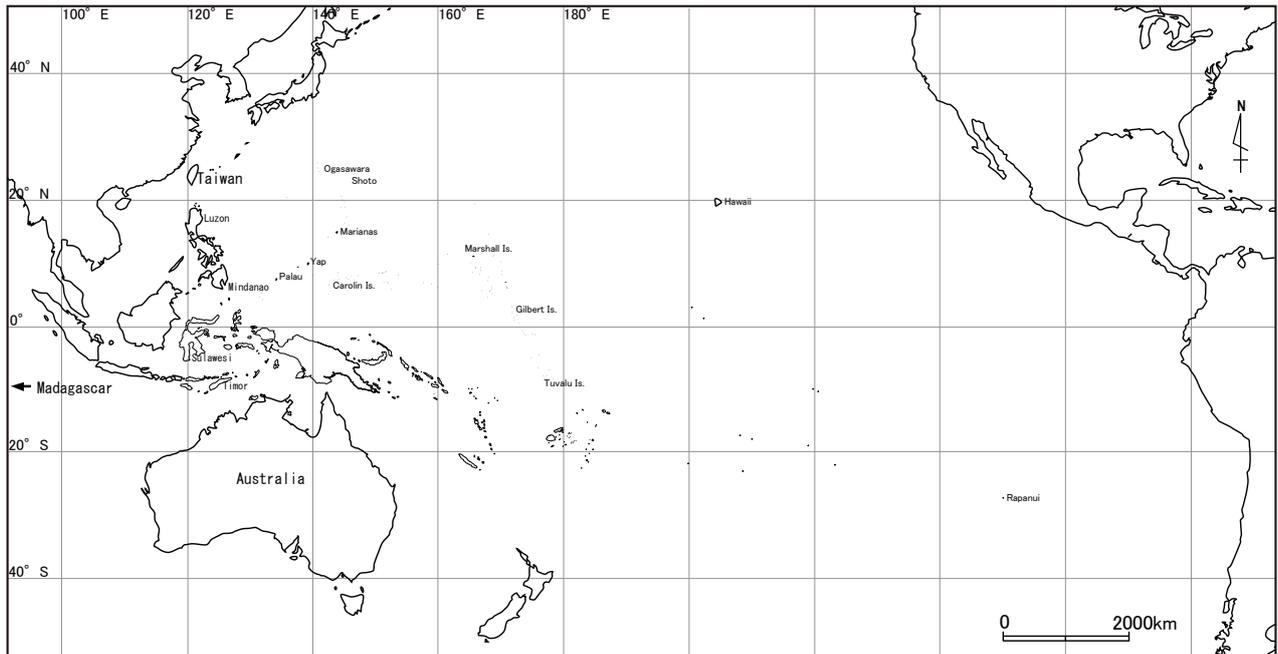


図1 オーストロネシア語族の分布範囲 (マダガスカル除く)

スト 1988、ベルウッド 1989)」と考える。

形質人類学者の片山一道は、ポリネシア人・ラピタ人の起源を「オーストロネシア語族の言語の中でポリネシア語の位置、血液型遺伝子の分布、古人骨の形質的特長から推測するとフィリピンや台湾、中国南部の沿岸部や日本列島南部に広がる東アジア海域世界に求められる。ただし、根菜農耕や家畜（イヌ・ブタ・ニワトリ）といった文化要素からは東南アジアを連想される（片山 2002：16）。」としており、考古学的な説明を行なうために形質人類学・動物学・植物学の研究成果を援用している。

言語学では、音韻体系・言語形態・統語論・語彙などさまざまな局面を複数の言語間で比較分析を行なう。言語はつねに変化し、とりわけ語彙は時代の造語や流行の変化によって変わりやすい。他方、音韻体系や統語論など言語の構造に関する属性は変化しにくい。考古学者が遺物の型式額的属性に着目し遺物を比較研究するように、言語学者は同系関係にある言語間で維持されるセット関係を抽出し、それに基づいて「祖語」を復元する。この方法に基づきロバート・ブラストはオーストロネシア語の系統樹を作成している（図2）。研究者によって、比較に用いる語彙や音韻の差異はあるが、台湾におけるオーストロネシア語もオセアニアのそれと共通の祖語を有しているとされる。

例えば、グレイら（Gray et al. 2009）は東アジアからポリネシアに向けて行われた移動について、オーストロネシア語の210個の基本語彙に関する類似性に基づいて、集団間の系統樹を作成した。その結果、オーストロネシア語族のルーツは台湾にあり、約5,000年前に分化し始めたという。東アジアからポリネシアへの移住は3段階に区分されている。最初の段階では台湾～フィリピンに展開、第2段階ではフィリピン～西ポリネシアへ、第3段階で東ポリネシアへの居住を開始する。これらの画期の背景には障壁となる海が存在が想定されており、海を越えて居住域を拡大するために、より優れた技術や社会革新が必要であり、移住のきっかけであったとされる。

植物学からも台湾を含む、東南アジア・オセアニア地域に広がる共通性を見出すことができる。タロイモ・ヤムイモに代表される根菜類農耕がそれに当たる。東南アジア・台湾といったモンスーン地帯では稲作やマメ栽培といった雑穀農耕も行なわれているが、オセア

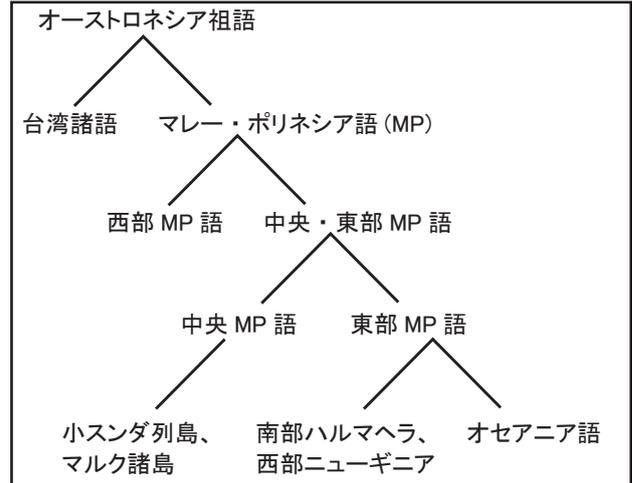


図2 パウリー・ロスによるオーストロネシア語の系統樹
(後藤 2003：74 より)

ニアではいくつかの例外を除いて雑穀農耕は行なわれず、根菜農耕が主体を占める。わずかな例外も比較的新しい時代になって、外部からの影響で稲作などが行なわれたようである。また、根菜農耕の特色として、作物の繁殖は根分け・株分け・さし木などであり、種子というものが利用される場面が見られない、バナナやサゴヤシ、パンの実、マンゴーなどの果樹栽培が東南アジア・オセアニアの各地で見られる。栽培バナナの原産地はマレー半島付近と見られる。

稲作は台湾の大坵坑文化で存在が確認されているが、メラネシアを経由する時点で脱落したと考えられている。マリアナ諸島のロタ島で靱圧痕のついた先史時代の土器片が出土しているが時期がはっきりしない。16世紀にスペイン人がチャモロ人に稲作を伝えたという記録もあることから、後世の遺物が混入した可能性も残る。その他の地域で一時的であれ稲作が行なわれていた事例でも、20世紀になってから日本人や中国人によって伝えられたものである。オセアニア地域へ人類が最初に入植した際には、稲作技術を保有しておらず、マリアナ諸島で先史時代の稲作が行なわれていたことが事実だったとしても、それは後発の移動集団によって持ち込まれたがひろく普及するには至らなかったのではないかと筆者は考えている。

民族学では現存する、あるいは民族誌資料に記載された物質文化や習俗、親族組織や社会構造を分析することで社会・文化の再構成を試みる。

台湾・東南アジアからオセアニアにかけて共通する文化・習俗として、竹馬・あやとりなどの遊戯、ビン

ロウジュやカヴァなどの嗜好品、文身、アウトリガカヌー根菜農耕などが知られている。対象があまりにも多岐にわたり、筆者の力量では全てを網羅して説明をすることはできそうもないが、大林多良らの研究グループは、中国南部・台湾の少数民族を含む東南アジア、オセアニアにおける 129 の民族集団を対象に、33 の文化の処諸分野から 486 の文化項目を抽出し、データベースの作成・分析を行なっている（大林ほか 1990）。クラスター分析の結果、東南アジア巨大群に含まれる台湾亜群（II-A-i）にはヤミ族を除く台湾の全ての高砂族諸族を含みルソン島のカリング族もこの群に含まれる。また、因子分析の結果からは台湾の諸民族は華南およびマイクロネシアとのつながりが強く、東南アジア島嶼部のマレー系亜中核諸文化との対象を示す結果が得られ、「台湾の雑穀栽培民文化という古層文化とマレー型の新相の亜中核文化との対象があらわれている（大林ほか 1990: 207）」と解釈されている。・非単系社会：台湾やポリネシア、東南アジアで優勢個人は、その出自をたどるのに母か父を通じて、あるいは両者を通じて選択することが出来る。

分子遺伝学

遺伝子解析技術が目覚ましい進歩を遂げたこともあり、遺伝学の立場から人類の移動史に関する議論が活発化している。

スーらによる Y 染色体 DNA の解析結果（図 3）によれば、Y 染色体上の 19 の両対立形質のうち、台湾先住民に見られるハプロタイプのいずれもがマイクロネシアとポリネシアで見つからず、メラネシアで特徴的に見られるハプロタイプもポリネシア人には確認されなかった。その一方でポリネシア、マイクロネシア、台湾先住民のハプロタイプはすべて東南アジアの民族に見られ、東南アジアがポリネシアおよび台湾への拡散拠点であったと結論付けた（Su et al. 2000）。論文中に掲載されたハプロタイプの分析値をもとに、クラスター分析を行なったところ、扶南族を除く 4 集団が比較的近似し、いずれの集団も東南アジアの集団ともっとも近接するという結果が見られた。しかしながら、ポリネシア人と台湾諸族よりもメラネシアの集団がより近似するなど、かならずしもこのモデルに合致する結果とはいえない。

モッドレイら（Moodley et al. 2009）は、台湾・オー

ストラリア先住民・ニューギニア高地人、ニューカレドニアのメラネシア人およびポリネシア人のヘリコバクターピロリ菌の DNA 塩基配列を比較し、数千年の間別々に進化してきたと思われる菌株 2 種を確認した。ひとつは hpSahul と呼ばれるもので、現在はインドネシア諸島になっている陸橋を渡って、ニューギニアおよびオーストラリアへとヒトが移住したのに伴い、30,000 年以上前に、アジアのピロリ菌から分化したものである。もうひとつは hpMaori で、フィリピンやポリネシア、ニュージーランドへの 2 度目のヒトの移住の際に台湾から約 5,000 年前に広がっていったものであるという。

このように、遺伝学からは起源地や移動が行われた年代に関して具体的な結論が提示されている。しかしながら、斎藤成也が指摘するように遺伝子頻度データによる集団間の遺伝的近縁図読み取りに関際しては注意が必要である。斎藤は注意事項として以下の 3 点を挙げている（斎藤 1995: 34）。

1. 集団の人数の少ない場合は、遺伝的浮動の影響が大きいので、集団間の遺伝距離も大きくなる。
2. 集団が分岐したあとも相互に移住を繰り返せば、遺伝子頻度が似通ったままにとどまる
3. 遺伝的近縁図は、あくまでも現在の集団間の関係であり、我々は過去の様々な現象が重なり合ったままの状態しか見ることが出来ない。

「3」の問題に対して、ストレイやマティス・スミスらは遺跡出土のイヌ・ブタ・ニワトリ・ネズミといった、人間と共生する家畜ないし動物遺存体から DNA を抽出し、解析することで解決を図ろうとしている（Storey et al. 2007, Matisoo-Smith et al. 1997; 1998; 2005; 図 5 など）。特にニワトリの DNA 解析結果は、ポリネシア人の起源地問題だけでなくポリネシアと新大陸との間に接触を示唆するなど、ポリネシア人の移動に関する議論に大きな影響を与えている。

ヨーロッパ人航海者がオセアニア地域に訪れた際、サツマイモやカボチャといった新大陸原産の栽培植物が目撃されている。いっぽうでアメリカ大陸におけるニワトリの導入時期についても明らかになっていなかった。なぜなら近年まで先史時代遺跡からは出土していなかったからである。ピサロが 1532 年にペルー

に着いたとき、ニワトリが飼われているのを記録している。ストレイらが現存するニワトリおよび遺跡出土のニワトリの DNA 解析を行なっている (Storey et al. 2007)。

クック諸島のマンガイア遺跡から、AD 1000 年ころとされるサツマイモの遺存体が出土しているのをのぞ

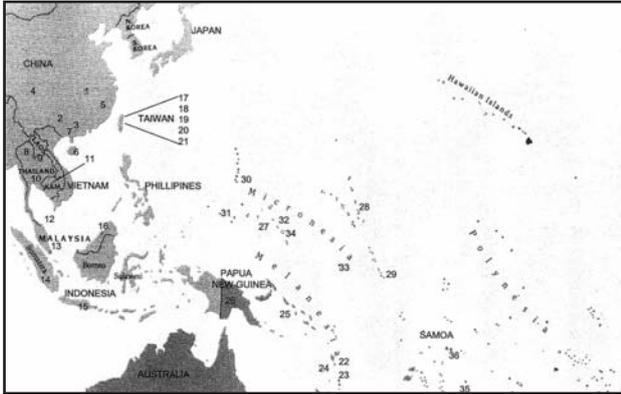


図 3 Y 染色体の分布状況 (Su et al.2000 より)

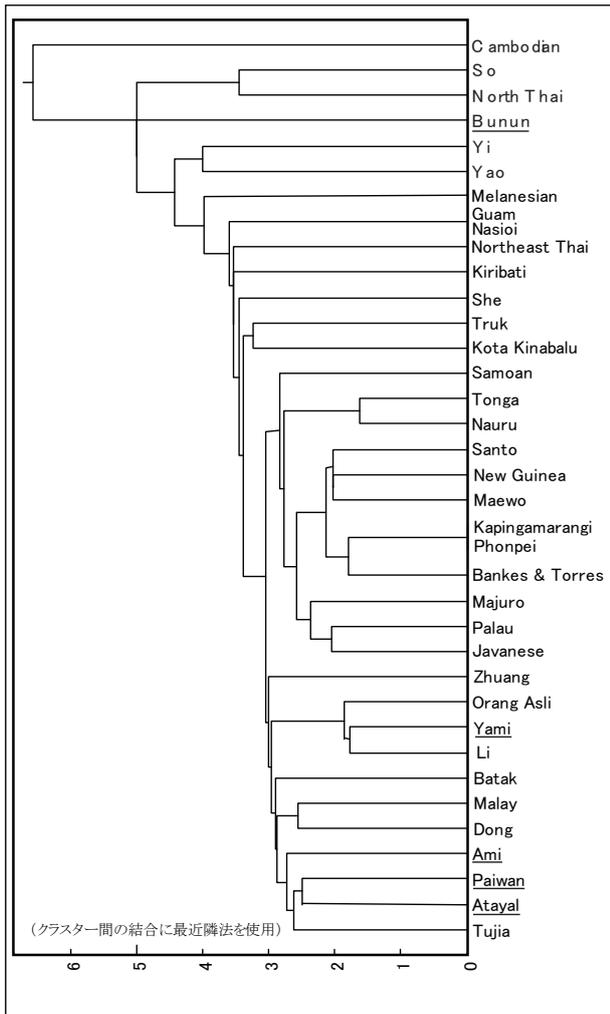


図 4 Y 染色体から見る諸民族の関係 (Su et al.2000 : Tble1 をもとに筆者作成)

けば、先史時代におけるポリネシアとアメリカ大陸の文化的つながりを示す遺物は知られていなかった。2002年に発掘された南部中央チリのアラウコ半島南側海岸から内陸3キロに立地するエル・アリーナ1遺跡においてニワトリの骨が出土している。ニワトリ骨の放射性炭素による年代は 622 ± 35 B.P. で、校正すると AD 1321-1407 となる。誤差範囲を大きく見積もったとしてもコロンブスの新大陸発見以前の年代におさまる。ミトコンドリア DNA の分析結果では、太平洋のニワトリには二つのミトコンドリア系列があり、アメリカ大陸のエル・アリーナ1遺跡で出土したニワトリの骨はポリネシア起源の系統に属するものである。こうした遺跡出土の家畜遺存体から抽出した DNA

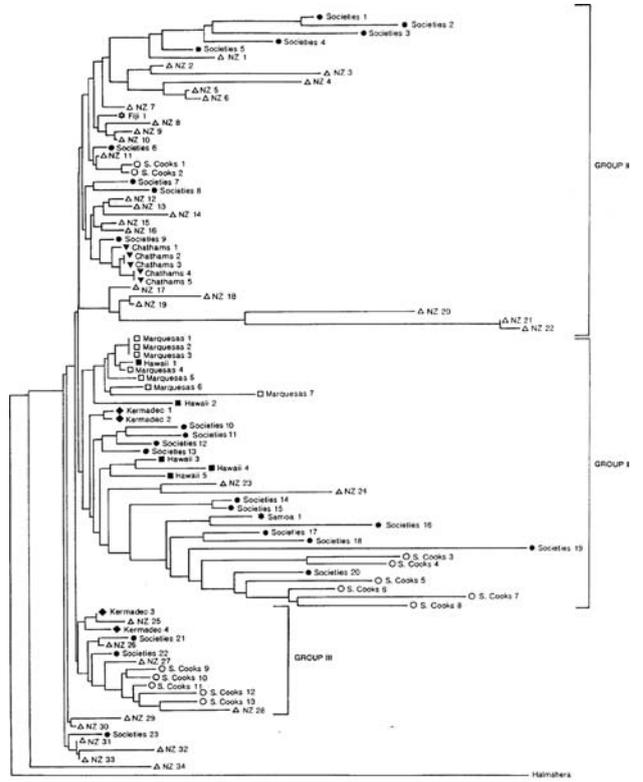


図 5 ラットの DNA 解析結果

(Matisoo-Smith et al.1998 : Fig1 より)

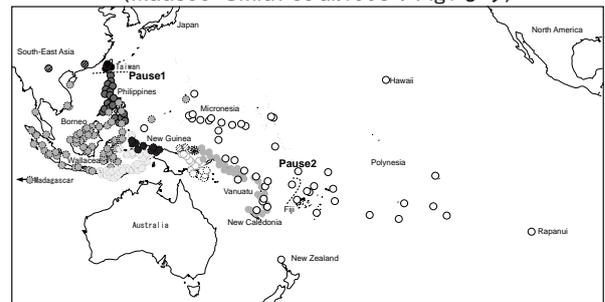


図 6 オーストロネシア語の類型分布

(Gray et al. 2009: Fig.1 をトレース)

解析の結果は、二度以上にわたって東南アジアから太平洋に家畜が持ち込まれたということの意味する。

このように、遺伝学の進展によって、ポリネシア人に関する人間の移動史に関する具体的な議論が活発になっている。遺伝集団が分岐した年代まで具体的に述べられているのは、遺伝学において集団間の遺伝的距離が集団が分岐した時間的長さを表すと考えられ、分岐年代を推定する計算式も開発されていることがその理由である。

しかしながら遺伝的距離は地理的距離も同時に表していることに注意すべきである。さらに言語学や民族学的なグループと遺伝グループの間に必然的な関係があると保障されているわけでもない。なぜなら言語学あるいは遺伝集団が分岐した時点から不動・不変であるという保障はない。傍証材料に使われる従来の研究成果は、ポリネシアへの人類の移動に関する歴史が単純なものではなかったことを示しているうえに、未解明な部分もいまだ多く存在する。さらには、いずれの学問成果も他の学問分野と相互依存の状態にあるため、DNA解析から導き出されたモデルが言語学や考古学のモデルに合致するからといって安易に使えるものではない。

考古学から見たポリネシアへの移動

台湾には大坌坑文化（BC 3500～）をはじめとする円山・牛罵頭・牛稠子などの諸文化があり、縄蓆文土器や幾何印文土器は中国南部にも見られる。台湾新石器時代は初期・中期・後期・晩期の4期に区分される。初期は大坌坑文化が充てられ、「粗縄紋陶」と言われる縄蓆文土器が用いられる。中期には円山文化と牛罵頭文化が現れ、それぞれ茶色の無文土器、赤みを帯びた縄蓆文土器が用いられる。牛罵頭文化の次に黒陶の縄蓆文土器を用いる營埔文化が続き、後期は「卑南文化」が充てられる。晩期には、土器から縄蓆文装飾が消えて彩陶土器が出現、器形も変化する。

縄蓆文や幾何印文が施された土器を持つ新石器文化は同時期の東南アジア各地においても確認されている（図9）が、地域や時代によって縄蓆文や幾何文の種類が異なるうえに、各文化で用いられた土器の系譜関係が必ずしも明らかになっているわけではない。

紀元前3000年ごろにはインドネシア西部で縄蓆文土器が、インドネシア東部で無文土器が見られるが、

不明な点が多い。

マレー半島では、バンカオ文化期（B.C. 3000～1000）には縄蓆文土器が主体で沈線文がこれに伴い、器形は脚・台付の土器または三足土器が無脚化する。グアチャ遺跡では縄蓆文主体であるが、曲線基調の刻文土器を含み、三足土器は見られない。半島北部ではバンカオ様式の土器が多数の洞窟で発見されているが、南部については分かっていることが少ない。鉄器はあるが青銅器は見られず。

土器以外の遺物に注目すると、やや時代は下るガリンリン0型耳飾として知られる遺物が紀元前1千年紀にベトナム・台湾・フィリピンを中心に分布していた。なかでも第3型式は中国南部、第4型式になるとタイやボルネオまで分布を拡げる。中村慎一と後藤明はその起源を紀元前1千年ころのベトナム北部のレッド・リバー付近に求める（Nakamura & Goto 1992；後藤 1996:171-2）。また、HsiaoらはEPMAを用いて、台湾・東南アジア出土のリンリン0型耳飾および双頭式装身具の産地推定を行い、116点全てが台湾産の翡翠であることが確認された（Hsiao et al. 2007）。

このように、台湾からオセアニアへの直接的な移動が確認されているわけではないが、東アジア～東南アジアにわたる広範囲でヒト・モノが移動していたことを伺わせ、言語学によるオーストロネシア語の分岐モデルとも矛盾しない。

やや時代は下るが、ベトナムのトンキン地方を中心に中国南部まで広がるドンソン銅鼓の破片と見られる金属片がイリアン・ジャヤやパプア・ニューギニア東方のマヌス島で発見された例（Emberg 1959；Spriggs 1990）がある。マレー半島からスマトラ、ジャワを経てニューギニア近隣まできたものと見られる。

オセアニアに現れた、最初のオーストロネシア語集団によるものと見られる新石器文化がラピタ文化である。B.C. 1500頃にビスマーク諸島に現れ、鋸歯状押印文（dentate stamp）と呼ばれる櫛歯状の工具によるスタンプ文、回転押型文、沈線文が施された土器と無文土器を持つ。器種は壺・碗・皿を中心とし、高坏・円筒型器台・蓋を伴うことがある。B.C. 900年ごろにはトンガ・サモアにまで進出した。遺跡から出土するのは土器以外に黒曜石の不定形剥片、磨製石斧、犬・豚・鶏の家畜、高床式の水上市家屋、貝製装飾品、刺青用針、が見られ、同じく出土する魚介類やウミガメの遺存体

から、リーフ内の海洋資源を積極的に利用していたと考えられている。ラピタ文化では遠距離交易が行われていたことも知られている。特にタラセア島産の黒曜石がサンタクルーズをはじめとした東方の島々の遺跡からも出土している。

ナイタバレ遺跡出土土器の産地推定では、分析した土器の73%はモツリキ島もしくは隣接するオバラウ島の粘土を用いているが、11%はビティレブ島東部のレワ川流域、7%は150kmはなれたカンダブ島、9%は230km離れたラウ諸島の粘土を用いていることが分かっている (Nunn et al. 2007、石村 2007:115-6)。

松本直子・中園聡らが蛍光X線分析を実施したボウレワ遺跡採集品の中には、ビティレブ島内で制作された土器群とは明らかに異なる成分を示すものが多数含まれるという (松本ほか2007、中園ほか2007)。分析資料の多くは無文土器であり、6点のラピタ土器を含むが、筆者が同遺跡を訪れた際には、さまざまな時代の土器が地表面に見られた。分析資料個別の考古学的な位置づけが明らかになっていないので、ビティレブ島以外から持ち込まれたと考えられる土器がいつ、どこで製作されたのかが問題として残る。

ソロモン諸島とヴァヌアツの間に位置するティコピアでは、シナプブ期になると土器は作られなくなるかわりに、300km離れたバヌアツからマンガアシ土器が、1000km離れたフィジーからナヴァツ土器と呼ばれる叩き目文土器が運ばれた (Kirch and Yen 1982)。

サモアのツツイラ島のアオア遺跡では500年前まで土器生産が継続した可能性が指摘されている (Clark and Michlovic 1996) トンガではポリネシア無文土器 (紀元前500～西暦500年)以降、土器の生産が行われなくなったとされるが、18～19世紀にこの地を訪れたヨーロッパ人航海者は土器の存在を記録している。ジェームス・クックは1773年の第2次航海、1777年の第3次航海でトンガタプ島、ハアパイ諸島を訪れた際、土器を見ており、それらについて在地産であろうと推測している。1826～1829年にポリネシア・メラネシア地域を航海したデュモン・ダーヴィルは、トンガに立ち寄った際に土器を用いた調理を目撃しており、フィジー産のものと記述している。1827～1828年に南太平洋を航海したピーター・ディロンもダーヴィルと同じ様な記述をしている。ハアパイ諸島のトゥングア島でも詰がたもにや叩き目文の施された

フィジーの土器が確認されている (Kaepler 1983)。

民俗誌資料や東ポリネシアの遺跡では土器は見られないことから、土器が文化要素から脱落したと説明されてきたが、メラネシアや西ポリネシアではラピタ文化以降の土器型式の存在が知られていたり、新たに報告される状況からは、集約生産されたモノの広域流通の存在が伺える。

西ポリネシアにとどまっていた集団が、東ポリネシアへ向けて移動を再開するのは、ラピタ文化が終焉を迎えてからのことである。

サグスはマルケサス諸島での発掘調査に基づき、同地域への居住開始年代をB.C. 150年に位置づけた (Suggs 1961)。これに対し、篠遠喜彦が反論している (Sinoto 1970)。ハネ遺跡の調査成果を元に4時期からなる東ポリネシアの文化史編年を提示し、提示された物質文化の中には土器は含まれていない。編年に際してハネ遺跡の第I～VI層出土品が用いられ、無文土器が出土した第VII層はこの中に含まれていないからである。篠遠が土器の出土した第VII層を編年から除外したのは、土器の出土量自体がごくわずかであり、他の遺跡では土器の出土例が全く無かったために、第VII層の遺物を同地域での植民開始と関連しないものと考えたからである。実際、ハネ遺跡の調査から30年以上が経過しても同地域での土器の出土例は増加していない。篠遠は、マルケサスをはじめとする東ポリネシアでの発掘データをもとに東ポリネシアへの移動モデルを復元している (図7)。このモデルに対し、異を唱える研究者も存在する。

カーチは、篠遠が否定したハアトウアトウア、ハネ遺

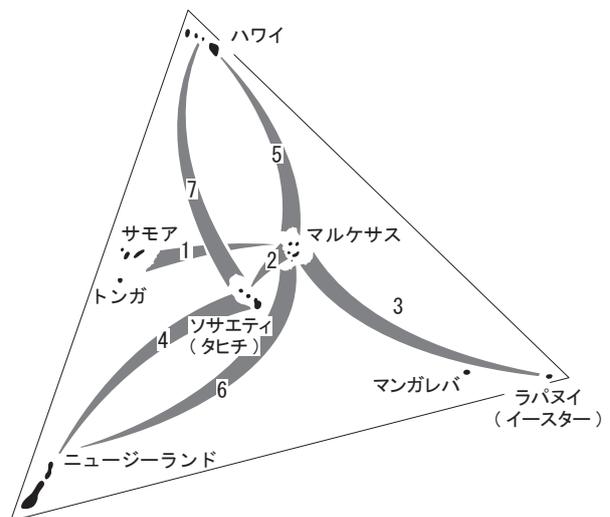


図7 東ポリネシア植民モデル (Sinoto 1968: をトレース)

跡やハワイ島ブウアリ遺跡第Ⅲ層（3世紀）、オアフ島018遺跡第Ⅲ層（4世紀）のC14年代測定データや遺物組成を取り上げて、より早くから東ポリネシアにおける居住・拡散が開始されたと主張する（Kirch 1986）。スプリッグスとアンダーソンは、東ポリネシアにおける炭化物資料と人工遺物との共伴関係の有無、測定値の信頼度による選別を行った結果、紀元後第1千年紀前半までのデータを棄却した（Spriggs and Anderson 1993）。

このように、オセアニアにおける人類の移動史は、いまだ意見の一致を得ないのであるが、オーソドックスなシナリオとして、もっとも受け入れられているのはベルウッドの提唱する移動シナリオ（ベルウッド 1989; 2008; 図 10）であり、以下のようにまとめられる。

- (1) 紀元前 4000 ～ 3500 年に先オーストロネシア語系民族の台湾への移住。稲や雑穀などの穀物や根菜類を栽培する農耕民で航海技術は未発達。台湾では縄蓆文文化を生み出した。その子孫が台湾先住民。
- (2) 紀元前 3000 年ごろ、オーストロネシア祖語の集団がフィリピン北部へ移住。航海技術が改良され、縄蓆文土器は無文ないし赤色スリップ土器へと変化。
- (3) 紀元前 2500 から 2000 年代にかけて、マレー・ポリネシア祖語段階の文化がフィリピン南部からボルネオ島、スラウェシ島、マルク方面へ拡散。樹木作物（バナナやブレッドフルーツ）および根菜類が穀物と同程度に重要になった。一部の人々がジャングルに入り込み、ボルネオ島やスマトラ島で熱帯雨林における採集経済が開始された。
- (4) 紀元前 1500 ～ 1000 年にかけて、スルー海やスラウェシ島付近で移動性の海洋文化が出現。
- (5) 紀元前 1500 ～ 1000 年の間に、ビスマルク諸島付近で生まれたラピタ文化がリモート・オセアニアのトンガ・サモアにまで拡散。航海技術は未踏の島に及ぶほどに進展したが、パプア系の住民によってすでに居住されていたニューギニア島へは海岸部を除いて侵入しなかった。
- (6) 紀元前 1000 年から約 1000 年間、オーストロネシア語文化がベトナムやマレーシアへ進出。先住農耕民との間に競争ないし共生が起こった。
- (7) 紀元前 500 年以降、青銅器および鉄器文化が東南アジア島嶼部に導入。

考察

文化の起源地について考えるにあたり、人工物や習俗の研究のみならず、ヒトや家畜・植物など文化伝播に伴って移動したと考えられるものの研究が問題解決に大きく貢献する。そのため、オセアニア地域の文化研究においては、さまざまな文化要素が研究対象とされ、時には生物の形態や遺伝子など生物学的な研究も進められてきた。

ポリネシア人の起源を中国南部および台湾に求める説の形成には、とりわけ言語学および遺伝学の研究成果が大きく寄与している。言語学や遺伝学の研究成果は具体的な移動モデルや年代を提唱してきたが、それが集団間の系譜関係を探る手がかりを提供しているとは限らない。なぜなら研究に関わる技術があくまで手段の域を出なず、言語学や遺伝学の研究者が解析結果を解釈するため、程度の差こそあるが既知の文化史的背景を加味していることも確かなためである。いかなる学問分野を基盤とした技術を援用しようとも、確固たる理論的枠組みなしに用いられる研究技術は、歴史の復元に最終的な結論を導くことができない。言語学・遺伝学ともに現生資料を主に扱ったものであり、分析資料に遺跡出土品を使うにしても考古学的な位置づけができなければ、最終的な判断はできない。

しかしながら考古学資料も未だ断片的である。台湾からポリネシアまでの系譜を追跡するためには東南アジア、特にインドネシア西部の調査件数が不十分であり、新たな調査例によってそれまでの常識が容易に覆される可能性は十分にある。

また、先史時代の台湾の先住民と今日の台湾におけるオーストロネシア語を話す人々の系譜関係が未解明である現状を考えると、ポリネシア文化の起源を台湾に求めるのは時期尚早であり、現時点では東南アジア周辺海域を起源地とするのが妥当であろう。両者が共通の祖先をもっているならば、いつごろ両者は分岐したのかを解明する必要がある。

生物学的な人間集団と言語集団は必ずしも一致しない。遺伝学の進展には目を見張るものがあるのは事実であるが、それが言語学や民族学、考古学に基づいて設定された集団間の関係と一致するわけではないことを想定するのは、容易に国境を越えて移動する現代社会に生きる我々にとって難しくはないであろう。

おわりに

本稿は平成 20 年 11 月 6 日に行なわれた「台湾大学・金沢大学学術交流講演会」における講演内容をもとに一部加筆したものである。

参考文献

Bellwood, P. 1978

The Polynesians: Prehistory of an Island People.
THAMES AND HUDSON.

Bellwood, P. 1997

Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago.
University of Hawai'i Press.

Bellwood, P. and White, P. 2005

Domesticated Pigs in Eastern Indonesia. *SCIENCE*.
vol.309 p.381

Dickinson, W. R. 2006

*Temper Sands in Prehistoric Oceanian Pottery:
Geotectonics, Sedimentology, Petrography, Provenance.*
The Geological Society of America. Special Paper 406

Emberg, J. E. 1959

Furter notes on the northern Mejbats (Vogelkop, western
New Guinea), *Ethos* 24: 70 -80.

Gray, R. D. , Drummond, A. J. , and Greenhill, S. J. 2009

Language Phylogenies Reveal Expansion Pulses and Pauses
in Pacific Settlement. *SCIENCE* 23 Vol.323, no.5913,
pp.479-483.

Hunga, H. , Iizuka, Y. , Bellwood, P. , Nguyen, K. , Bellina, B. ,
Silapanth, P. , Dizon, E. , Santiago, R. , Datan, I. , and Manton, J.
2007

Ancient jades map 3,000 years of prehistoric exchange
in Southeast Asia. *PNAS*. vol. 104, no. 50 pp.19745-19750.

Kirch, P. V. and Yen, D. E. 1982

*Tikopia : The Prehistory and Ecology of a Polynesian
Outlier.* Bernice P. Bishop Museum Bulletin 238.

Larson, G. , Dobney, K. , Umberto, A. , Fang, M. , Matisoo-
Smith, E. , Robins, J. , Lowden, S. , Finlayson, H. , Rand, T. ,
Willerslev, E. , Rowley-Conwy, P. , Andersson, L. , and Cooper,
A. 2005

Worldwide Phylogeography of Wild Boar Reveals Multiple
Centers of Pig Domestication. *SCIENCE*. vol.307,
pp.1618-1621

Matisoo-Smith, E. , Allen, J. , Ladefoged, T. , Roberts, R. , and
Lambert, D. 1997

Ancient DNA from Polynesian rats: Extraction,
amplification and sequence from single small bones.
Electrophoresis 18 pp.1534-1537

Matisoo-Smith, E. , Roberts, R. , Irwin, G. , Allen, A. , Penny, D.

, and Lambert, D. 1998

Patterns of prehistoric human mobility in Polynesia
indicated by mtDNA from the Pacific rat. *PNAS*. vol.95
no.25 pp.15145-15150

Moodley, Y. , Linz, B. , Yamaoka, Y. , Windsor, H. M. ,

Breurec, S. , Wu, J. , Maady, A. , Bernhoft, S. , Thiberge, J. ,
Phuanukoonnon, T. , Jobb, G. , Siba, P. , Graham, D. Y. , Marshall, B.
J. , and Achtman, M. 2009

The Peopling of the Pacific from a Bacterial Perspect
-ive. *Science* 23 Vol. 323. no. 5913, pp. 527 - 530

Nakamura, S. and Goto, A. 1992

Re-examination of lingling-O type earrings in southeast
Asia and China. abstract paper of *29th International
Geological congress, Kyoto*. vol. 2, P.400

Nann, P. D. , Ishimura, T. , Dickinson, W. R. , Katayama, K. ,

Thomas, F. , Kumar, R. , Matararaba, S. , Davidson, J. , and Worthy,
T. 2007

The Lapita occupation at Naitabale, Motuliki Island,
Central Fiji. *Asian Perspectives* 46: 96-132.

Shing, R. , Bedford, S. , and Spriggs, M. 2007

Wanem is Akiologi ? Vanuatu National Center

Storey, A. A. , Ramirez, J. , Quiroz, D. , Burley, D. V. , Addison,
D. J. , Walter, R. , Anderson, A. J. , Hunt, T. L. , Athens, J. S. ,

Huynen, L. , and Matisoo-Smith, E. A. 2007

Radiocarbon and DNA evidence for a pre-Columbian
introduction of Polynesian Chickens to Chile. *PNAS*.
104: 10335-10339.

Su, B. , Jin, L. , Underhill, P. , Martinson, J. , Saha, N. ,

McGarvey, S. , Shriver, M. , Chu, J. , Oefner, P. , Chakraborty, R.
, and Deka, R. 2000

Polynesian origins: Insights from the Y chromosome.
PNAS vol.97, no.15 pp.8225-8228

赤澤 威 (編) 1992

『公開シンポジウム予稿集「先史モンゴロイド集団の
拡散と適応戦略」』平成 3 年度文部省科学研究費補助
金「重点領域研究」「先史モンゴロイド集団の拡散と
適応戦略」公開シンポジウム組織委員会

石川栄吉 1984

「太平洋諸島民の民族移動をめぐって」『海外学術調査
コロキウム「文化と人の進化に関する接点」第 2 回
記録』pp. 35-43 海外学術調査に関する総合調査研
究班

石村 智 2007

「土器の喪失? オセアニアの場合」後藤 明 編『土
器の民族考古学』pp. 111-122 同成社

岡 正雄 1994

『偉人その他』大林多良 (編) 岡正雄論文集 岩波書店

大林多良 1968

「東亜・東南アジア・オセアニアの文身と他界観」金
関丈夫博士古希記念委員会(編)『日本民族と南方文化』
pp. 711-738 平凡社

大林多良・杉田繁治・秋道智彌 編 1990

『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデー
タベースの作成と分析』国立民族学博物館研究報告別
冊 11 号 国立民族学博物館

尾本恵市 1984

「アジア・太平洋地域のヒトの起源」『海外学術調査コ
ロキウム「文化と人の進化に関する接点」第 2 回 記
録』 pp. 17-25 海外学術調査に関する総合調査研究班

片山一道 1991

『ポリネシア人 石器時代の遠洋航海者たち』
同胞舎出版

片山一道 2002

『海のモンゴロイド ポリネシア人の祖先をもとめて』
吉川弘文館 歴史文化ライブラリー 139

後藤 明 1996

『海の文化史 ソロモン諸島のラグーン世界』未来社
ニュー・フォークロア双書 25

後藤 明 2003

『海を渡ったモンゴロイド』講談社選書メチエ 264

斎藤成也 1995

「遺伝子から見た人種」科学朝日(編)『モンゴロイド
の道』 pp. 25-38 朝日選書 523

土田 滋 1989

「語族再考 —オーストロネシア語族の場合—」『三省
堂ぶっくれっと』 80 三省堂

中園 聡・松本直子・川宿田好見・黒木梨絵 2007

「フィジーにおける土器および関連資料の胎土分析」
『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』
pp. 220-221 日本文化財科学会

中園 聡・川宿田好見・折尾真紀・黒木梨絵・花田寛典・
平川ひろみ・池平壮峻 2007

「蛍光 X 線分析の応用による土器製作者個人の変異の
検討」『日本文化財科学会第 24 回大会研究発表要旨集』
pp. 222-223 日本文化財科学会

ピーター・ベルウッド 1989

「太平洋 —東南アジアとオセアニアの人類史—」
植木 武・服部研二 訳 法政大学出版局

ピーター・ベルウッド 2008

『農耕起源の人類史』長田俊樹・佐藤洋一郎 訳
地球研ライブラリー no. 6 京都大学学術出版会

松本直子・中園 聡・川宿田好見・黒木梨絵 2007

「フィジーにおける土器製作と胎土分析」『日本考
古学協会発表要旨集』 pp. 76-77 日本考古学協会

丸山清志 2002

「古代東ポリネシアと時期区分」『物質文化』
no. 72 pp. 43-60 物質文化研究会

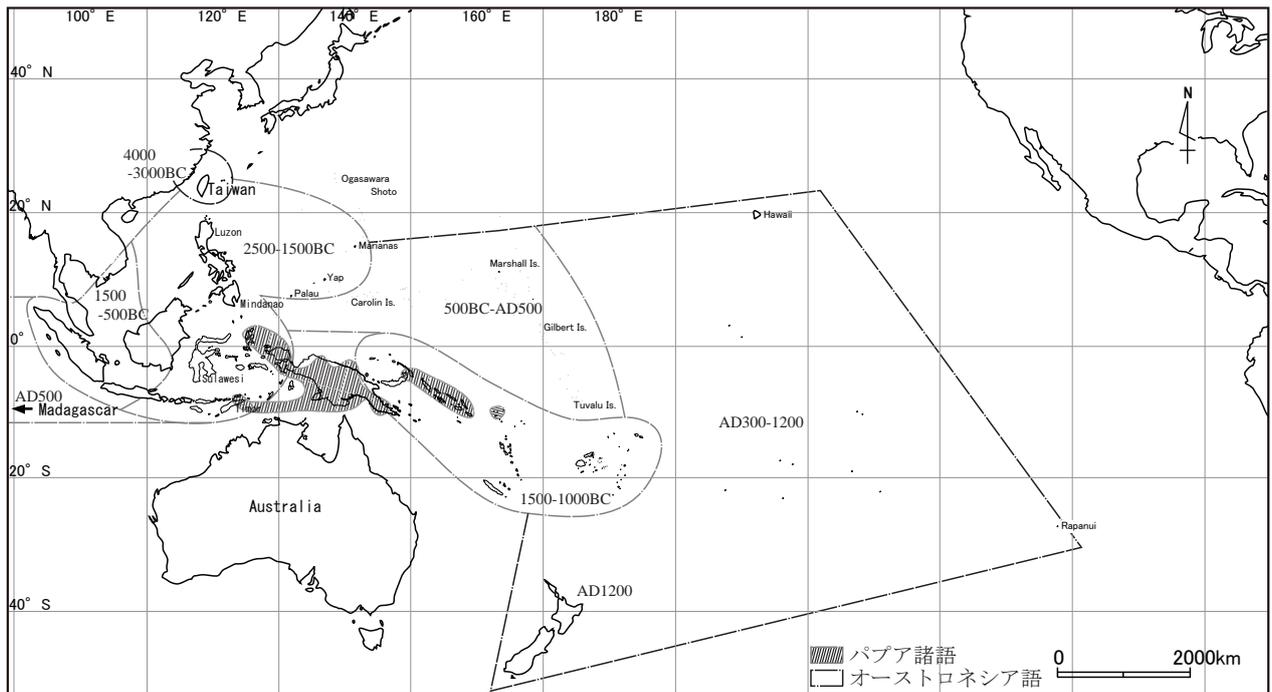


図 8 紀元前 5000 年以降のオーストロネシア語族の初期移住活動

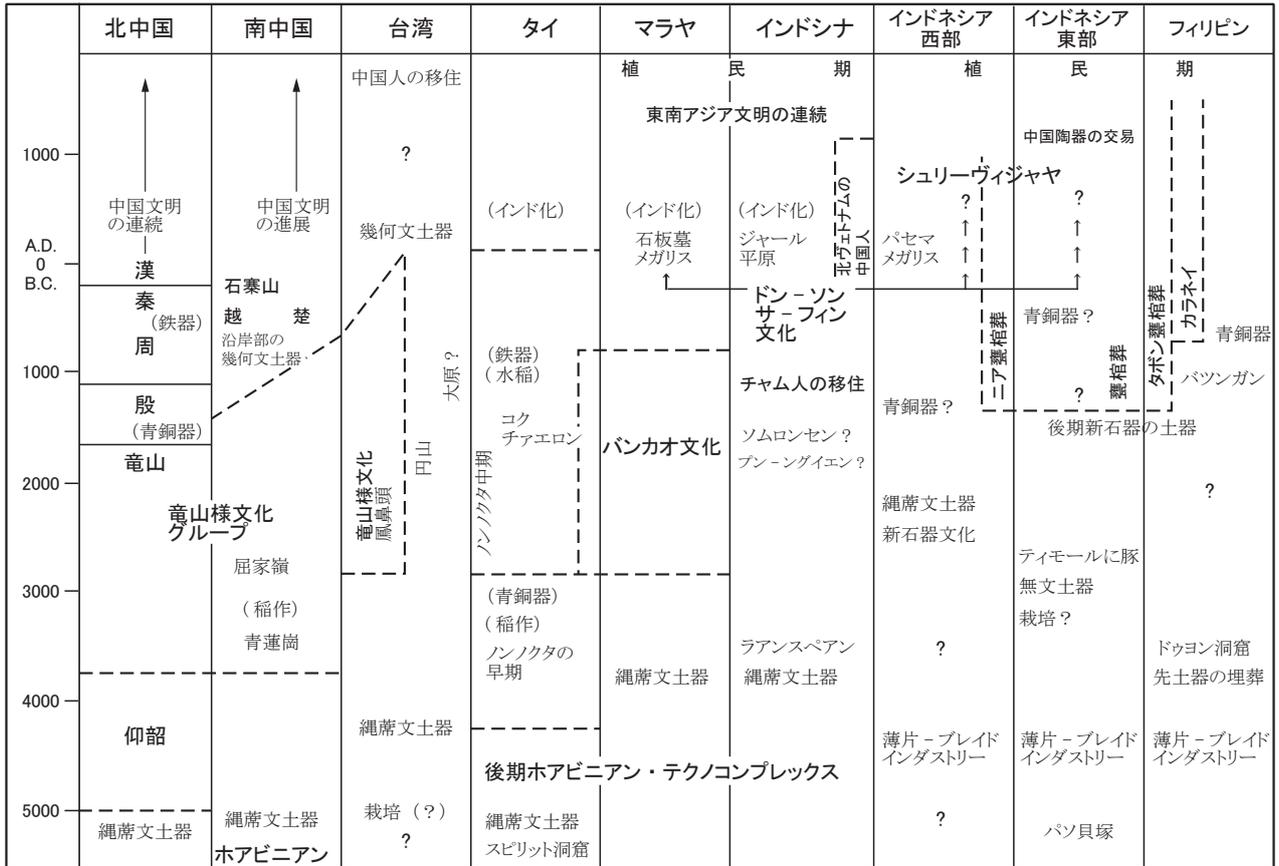


図9 紀元前5000年以降の東南アジア大陸部および島嶼部の文化編年 (ベルウッド 1989: 205より)

